

作文を書くこと 9 (作文の基礎—できごとを次々と書いていく)

(保護者と児童・生徒へ)

ニユージャージー補習授業校(2012年9月22日)

作文は、自分の体験を書きます。ですから、体験した「自分」しか、その事実を知りません。その事実を、読む人に伝えるのが、作文です。

ですから、「たいへんだ」「困った」「どうしよう」などという気持ちを書いてしまうと、読む人に、その場面の状況が伝わらないのです。

では、どのような書けば、読む人に、「情景」や「様子」や、「気持ちさえ」伝わのでしょうか？

答えは、これです。

事実や、できごとを、次々と、まるでテレビのドラマのように書き連ねていくこと

【例】 「たいへんだ」「困った」という「あせり」を伝えるために↓気持ちを書かず**に**事実を書く。

ぼくは、急いで家を出た。

走る。

汗が出てきた。

走る。

角を曲がった。

公園だ。

どんどん近づく。

いない。誰もいない。

数行しか書けなかった子どもが、このように書けるようになります。

まとめると、こうなります。

「テレビのドラマのように目で見たことを書く。」

「事実を次々と書き連ねて書く。」

「くやしいなどの気持ちを書かない。」

重ねて言えば、「たいへんだ」などと、結論だけを一言で書いても、読み手に伝わらないのです。

読み手には、その場面が想像できないのです。イメージ化できないのです。

ですから、「たいへんだ」と書いてしまうと、読み手は「ふーん。そんなものか」で終わってしまうのです。

そうではなくて、(作文のポイントはこです)例のように、**目に見えた事実を、テレビドラマのように次々と書き連ねていく**ことなのです。テレビドラマが面白いのは、ここに理由があるのです。

つまり、テレビドラマが面白いのは、結果や結論よりも、過程(プロセス)を大切にしているからです。皆さんがテレビを見ていて、結果が分かれば、テレビのスイッチを切りますね。

作文も、同じです。結論より過程を大切にします。結果は最後に書きます。過程こそ、事実を次々と書き連ねていくことにほかなりません。子どもにとっては、はじめは苦痛かもしれませんが、コツや意味を体得すると、書けるようになります。あとは、作文の技を使って書き慣れるだけです。

このように、作文を書くという教育は、子どもにとつても大人にとつても、時間と手間暇のかかる地道な教育です。だからこそ、作文によつて、子どもは(大人も)成長するのです。

★本校では、以前「ショートタイム作文」の時間がありませんでした。時間数や定着しない事実があり廃止したと聞いています。

作文の基礎は、家庭にあります。作文教育は家庭から始めてください。私も支援します。